

# 新学習指導要領の実施に向けて

## —「言語活動」の試み—

国語科 奥村 郁子

平成25年度より全面実施される学習指導要領の改訂（国語）では、「言語活動の充実」が重点項目として挙げられており、国語科の各科目及び領域の指導内容に、＜言語活動例＞が示されている点が特徴的である。また、今改訂においては、国語科以外の各教科科目においても、言語活動を充実させることとなっており、国語科はその中心となる教科と位置付けられた。他教科での言語活動が活発に行われるようになれば、これまで国語科で行ってきた学習内容や手法と重複する部分も出てくると思われる。そこで本稿においては、これまでの授業実践を振り返ることによって、実際に授業を進めていく中で見えてきた課題を示し、他教科とのバランスを考慮しながら、学習指導要領の掲げる目標を達成するにはどうしたらよいかについて考察を試みる。

キーワード：学習指導要領 言語活動の充実

### 1. はじめに

次期学習指導要領の全面実施まで、1年余りを残すのみとなった。今回の改定では、「教育内容の主な改善事項」筆頭に「言語活動の充実」が挙げられ、「国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習活動を充実」することが求められている。したがって「言語活動」は国語に限定したものではないが、一方で、言語の教育を主に担う国語科としての役割が小さいものでないこともまた言うまでもないことであろう。

そこで本稿においては、まず高等学校新学習指導要領の特徴について概観し、ついで国語科における「言語活動」という観点から、これまでに行ってきました筆者の実践および課題について報告することとする。

### 2. 新学習指導要領国語科の特徴（以下、下線は筆者）

＜高等学校学習指導要領解説 国語編』平成22年6月刊より＞

第1章 総説

### 第1節 改定の趣旨

#### 1 改定の経緯

- (1) 「知識基盤社会」「グローバル社会」において「生きる力」を育むこと。
- (2) 中央教育審議会答申（H20年1月）（以下、答申）の基本的な考え方
  - ①改正教育基本法などを踏まえた学習指導要領改訂
  - ②「生きる力」という理念の共有
  - ③基礎的・基本的な知識・技能の習得
  - ④思考力・判断力・表現力等の育成
  - ⑤確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
  - ⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立
  - ⑦豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

#### 2 国語科改訂の趣旨

- (1) 国語科改善の基本方針（答申より要約）
  - ①言語の教育としての立場を重視し、実生活で生きてはたらき、各教科などの学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること。

- ② 実生活の様々な場面における言語活動を具体的に内容に示す。
- ③ 〔言語文化と国語の特質に関する事項〕を設ける。
- ④ 学習の系統性を重視し、学校段階・学年段階ごとに重点的な指導が行われるようにする。
- ⑤ 古典の指導の重視、漢字の指導の充実、敬語の指導重視、読書の指導を内容に位置づけ。

### 3 国語科改訂の要点

- (1) 教科の目標の改善（下線部は、今回改訂された部分）

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

- ・教科の目標については、小学校及び中学校との系統性を重視するため、想像力を伸ばすについての記述を新たに加えているほかは、これまでと同様である。
- ・高等学校段階における想像力には、物事の微妙なところまで感じ取る心情的な側面のみならず、根拠に基づき先を見通すなど、論理的な側面もあること、そして、そのような想像力を一層発展させる必要があることを明示した。

#### (2) 科目構成の改善

- ・「国語総合」を共通必履修科目とし、その他の5科目を選択科目とする。

#### (3) 各科目の目標及び内容構成の改善

- ・「国語総合」の内容 3領域 + 〔言語事項〕
  - 3領域（現行言語事項の一部と言語活動例を含む）
  - + 〔伝統的な言語文化と国語の特質 に関する事項〕

#### (4) 言語活動の充実

- ・各科目及び領域の内容の(1)に指導事項、(2)

に言語活動例を示す。

#### (5) 言語文化に関する指導の重視

- ・「国語総合」に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を設ける。
- ・「現代文A」「古典A」(我が国の伝統と文化、とりわけ言語文化に対する理解を深めることを主な狙いとする科目)を置く。

#### (6) 学習の過程と系統性に配慮した内容の改善

#### (7) 読書活動の充実

## 第3章 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い

### 3 総則に関する事項

#### (5) 言語活動の充実（『学習指導要領』第5款の(1))

各教科・科目の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。

（略）今回の改定においては、言語に関する能力の育成を重視し、各教科・科目等において言語活動を充実することとしている。

このような活動の中心となるのは国語科である。各教科・科目等においては、国語科で育成した能力を基本に言語活動を充実していくことになる。（略）特に、高等学校国語においては、課題探究的な内容を持つ指導事項や言語活動例で、そのことを強く意識することが大切である。国語科の指導と、各教科・科目等の指導とが適切に連携して行われてこそ、言語に関する能力を確実に育成することができる。

#### <参考> 「国語総合」における言語活動例

##### A 話すこと・聞くこと

##### ア スピーチや説明をする言語活動

状況に応じた話題を選んでスピーチしたり、資料に基づいて説明したりすること。

イ 報告や発表をしたり、それらを聞いたりする言語活動

調査したことをまとめて報告や発表をしたり、内容や表現の仕方を吟味しながらそれらを聞いたりすること。

ウ 話し合いや討論をする言語活動

反論を想定して発言したり疑問点を質問したりしながら、課題に応じた話し合いや討論などを行うこと。

B 書くこと

ア 詩歌や隨筆などを書く言語活動

情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくりたり隨筆などを書いたりすること。

イ 説明や意見などを書く言語活動

出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書くこと。

ウ 手紙や通知などを書く言語活動

相手や目的に応じた語句を用い、手紙や通知などを書くこと。

C 読むこと

ア 脚本にしたり、書き換えたりする言語活動

文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。

イ 情報を読み取り、まとめて発表する言語活動

文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。

ウ 実用的な文章を読んで話し合う言語活動

現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと。

エ 読み比べたことについて、感想を述べたり批評したりする言語活動

様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方に

ついて、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。

### 3. 本校における実践報告および課題

以上の改定点を踏まえ、授業における筆者の実践のいくつかを報告する。いずれも、今回の改定の重点とされている＜言語活動を充実すること＞を意識して取り組んだものである。

(1) 短歌・俳句の継続的創作活動

対象：1年生 科目：国語総合（現代文）

＜国語総合＞における「B 書くこと」の言語活動

ア 情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくりたり隨筆などを書いたりすること。

毎月テーマを決めて、短歌または俳句を創作、提出させる。この活動を、古典文学における「月並（月次）」の屏風や和歌になぞらえて「つきなみ」と称し、全員のものをプリントにして配布することにより、楽しみつつも仲間の良い作品に刺激され、次回作の動機づけとすることをねらいとした。

始めるにあたっては、以下のような趣旨説明とテーマおよび過去の作品の例示を配布した。

これから一年にわたって、季節の推移や行事など、心に残るシーンを短歌や俳句に詠んでいこう。ほぼ一か月に一度のペースで、短歌または俳句、川柳を提出してもらい、いいものは「広見」で紹介したり、高文連の文芸作品コンクールに出品したりしようと考えています。次に、季節ごとのテーマとして考えられるものを挙げますが、これにとらわれる必要はありません。自分でよく推敲して、できるだけ完成度の高いものを出してください。

(分類)	主題（人事）	(自然)
春	二月 高校受験	花 桜 たんぽぽ 新緑 田植え
	三月 卒業 別れ 春休み	
	四月 入学 通学 授業・勉強 部活動 遠足	
	五月 連休 部活動（試合） 中間考査 スポーツ大会	

夏	六月	高校総体・総文 運動会	暑さ 雨 雲 雷 花 ひまわり
	七月	期末考査 通知簿 夏休み 補習	
	八月	夏休み 補習 宿題	
秋	九月	教育実習 新人大会(外)	紅葉
	十月	中間考査 スポーツ大会 開校記念祭	落ち葉 実り
	十一月	新人大会	
冬	十二月	期末考査 冬休み クリスマス 大晦日	寒さ みぞれ 雪
	一月	お正月 センターテスト	
	二月	如月祭 *三年生を送る	雷
恋 愛	初恋 片思い 恋の成就 恋の破局 破局後		
雑 (その他)	友達 家族 ペット 趣味 ニュース 話題 ブーム パソコン ケータイ 漫画 テレビ お笑いタレントなど		

〈参考作品（テーマ「入学」）＊過年度の作品〉

制服のみどりのリボン結び留め期待を胸に校門くぐる  
出会いの日ふと見上げてた桜の木風に吹かれて花舞い  
落ちる  
  
制服のリボンゆらして春の風まだ見ぬ友に心おどらせ  
教科書のインクのにはひ漂いて桜舞ふ日に夢抱きつつ  
桜色舞い散る中でシャッター音着なれぬ制服ぎこちない顔

以下に、毎月のテーマと生徒作品を紹介する。  
(\*は、平成22年度高文連文芸作品コンクール入賞作品)

○4月 最初のテーマは自由であったが、新学年の最初ということで、「入学」「春」をテーマとした作品が多く出された。

\*新しき靴の鳴る音聞きながら桜咲く道小走りに行く  
見回すと見知らぬ顔に知った顔あふれる期待と滲む  
不安と

\*秘めた恋空見上ければ花桜想い届ける春の風吹く坂  
道を上った先に桜舞う

○5月 テーマは自由であったが、5月中旬に行われた「中間テスト」と本格的に始まった「部活動」の作品が多かった。

部活動中学よりも大変だ高校生活気合を入れよう  
風が吹き宙に舞う球流されて僕らの夏は終りに向かい

○6月 学校生活や季節をテーマとする生徒が多く、  
マンネリ化が感じられたので、初めて「日ごろの生活（家庭・学校・授業など）や自分自身、身の回りの自然」という統一テーマを設けた。結果としては「梅雨」の作品が多数。

君が嫌い。そういう人は多いけど君の魅力は僕が  
知ってる。

朝早く弁当つくる母の顔照れを隠してありがとう言  
う

○7月 「信州現地学習」が統一テーマ。

\*七色の虹がきらめく黒部の地先人の汗ここに輝く

\*黒四の滝にかかる虹二本友との心も結ぶ架け橋

\*旅先で土用の丑に気づくかな

\*立山の縁のなかで大欠伸

○8月 「夏休み」が統一テーマ

\*ラムネ玉すかして見上げる夏の空

○10月 「身近な風景を詠む」が統一テーマ。以下の  
ようなコメントを付けて課題を出した。

今月のテーマ「身近な風景を詠む」

いつも何気なく見ている身近な風景を、じっくり観察してみる。

見慣れた風景を当たり前とせず、集中して観察すると新しい発見があります。たとえば、通学の途中で日々目にする風景や、ラッシュで込みあうバスの中での出来事など、あわただしい中でふと気付いたこと、目に飛び込んで来たものが意外に面白い素材となることがあるのです。そんな身近な風景を、短歌または俳句に読んでみましょう。人を詠むときには、多くの人を描くのではなく、

目に留まった一人の人物に絞ってみてください。見たものすべてを読み込む必要は有りません。最も印象に残ったものに焦点を絞りましょう。

一首、または一句できたら、必ず読み返し、できたら少し時間をおいてから、推敲してみましょう。短歌・俳句のきまりにちゃんとのつっているか、必ず確認してください。語順を変えて整えるだけで、すばらしく良くなることもあります。

裏面に秋の季語を挙げておきました。参考にしてください。

### ●実施状況、課題・反省点など

過去にも、生徒に短歌、俳句の創作をさせたことがあったが、今回のように定期的に提出を求めるというやり方ははじめてであったので、生徒がどのような反応をするかについては予測できず多少の懸念があった。しかし、入学当初からの実施であったこと、回を重ねるにつれて自身の創作活動に慣れてきたこと、仲間の作品を読む楽しみを感じたことにより、開始から1年以上経過し、生徒が2年生になった現在に至るまで、さほど抵抗を感じずに取り組んでいる様子である。(年度末に中断したときには再開を望む声が聞かれた。) 提出率も、100%ではないものの非常に良い状態が続いている。

昨年は、生徒への趣旨説明で告知したとおり、筆者の評価によって優秀と認められた作品を、高文連文芸作品コンクールに応募した。その結果、6作品(後掲)が入賞したこと、生徒には励みになったようである。コンクールへの応募作品に対しては、入賞以外の作品についても、手作りの表彰状を教室で贈呈して表彰した。また、提出された全作品をプリントして配布した際には、「歌集」「句集」の雰囲気を演出するとともに、作品公開への抵抗感を減らすため、作者名は姓名ではなく、名のみとした(資料①参照)。

この取り組みについて振り返ってみると、前述のように、入学当初から継続的に実施することを明示

したうえで始めたことが、その後スムースに続けることができた最大の要因であると思われる。また、作品を提出したことで終わるのではなく、プリントとして他の生徒の作品とともに配布することを繰り返すことで、他者の目を意識し、その評価に耐えうる作品作りを目指す動機づけにもなっている。

課題としては、生徒の生活経験の範囲での創作活動となるため、どうしてもマンネリ化する傾向がみられること、短詩形であるために、心の内面を深く掘り下げた作品になりにくいうことが挙げられる。短詩形といえども、青年期の感性を見事にとらえた作品作りが可能であることは、「現代学生百人一首」(東洋大学主催)ほかの各種コンクールの入選作品を見れば明らかであり、生徒の作品の中にも、そうできる可能性のあるものは存在するのだが、推敲を重ねて完成度を上げようというほどの意欲はあまり感じられない。全国レベルの優秀作品を紹介するなどして、生徒の意識を変え、創作意欲につなげていきたいと考えている。

また、教師の指導や添削についても、どの程度まで行ってよいものか、迷うところがある。単純な「てにをは」の訂正程度ならば問題はないだろうが、添削によってオリジナリティを損なってしまうことがあってはならないし、コンクールへの応募を想定している以上、直接的な指導はしづらいという面がどうしてもつきまとってしまうからである。

### (2) 小説教材を用いた創作活動

対象：1年生 科目：国語総合（現代文）

<国語総合>における「C 読むこと」の言語活動  
ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。

第1学年現代文(小説)の定番教材である「羅生門」では、学習後に、「下人のその後」を想像させ作文させるという活動が、学習の手引きなどにもあり、行われることが多い。もちろん、本文の読解を踏ま

えてその後の下人について考察することには意味があり、また、この課題に対して生徒がすぐれた作品を書くこともある。しかし、それだけでは作品がパターン化し、自分以外の生徒の作品を読む楽しみが少なく、また、想像力を働かせる余地も限られてしまう。そこで、小説の後日談を考察するという課題以外の視点を与えて生徒に考えさせ、生徒作品のバリエーションを広げることを意図して、以下のような課題を設定した。

次の中から一つのテーマを選んで、原稿用紙3～5枚程度のレポートを提出せよ。

- 1 新潮文庫「羅生門・鼻」収録の、「羅生門」「鼻」以外の作品の感想文
- 2 小説「羅生門」の続編（下人はその後どうなったか？）
- 3 小説「羅生門」を、視点人物あ（語り手）を変えて書く。

ex. 老婆が語る「羅生門」

死骸が語る「羅生門」

その他の人物を、新たに設定するなどしてもよい。

以下に、生徒作品2編を紹介する。

#### 生徒作品①「羅生門－下人のその後」

あれから十年ぐらいたっただろうか。下人はもうかつての下人ではなかった。あの羅生門での出来事は下人の心から何かしらの部分を奪い去り、その後の下人は生きるために悪事を繰り返していた。はじめのうちは下人の心の中にも多少のためらいがまだ残っていたが、それもだんだんとなくなってしまい、今ではもうまったくためらう心がなくなってしまっている。いや、なくなったのはためらう気持ちだけではないのかもしれない。今の下人の心の中にはもう何も残ってはいなかった。昔、どんなところに自分が生まれたのか、自分の親がどういう人だったの

か、どんな家に住んでいたのか、そして下人がこうなってしまったきっかけであるあの羅生門での出来事さえも、今でははっきりと思い出すことができない。下人は人目を忍んで悪事を働く生活に疲れ果てていた。限界だった。

下人はもう生きたいとは思っていなかった。このまま盗人として生きていっても、むなしいばかりだと、十年目にしてやっと理解したのだ。

下人はどこかの小さな町にいた……はずなのだが、今の下人の目の前にはかすかに見覚えのある大きな建物があった。下人は、不思議な感覚にとらわれながら、その中に足を踏み入れた。さっきまでは一步も歩けないほど弱っていた下人だが、これも不思議なことに、今は十年前のように体が軽く感じられた。その建物の中にはいると、急なはしご段があり、それを登って上の階に出ると、そこには猿のような裸の老婆が座っていた。それを見た瞬間、下人にはあの羅生門の記憶がよみがえってきた。というよりも、あの時のあの場所に戻ってきた気持ちになった。

老婆は下人を一瞥し、小さく笑ってこう言った。  
「どうじゃ、盗人になっても何もいいことなどなかつたじゃろう。というわけで、その手に持っている私の着物を返しておくれでないかえ。」

そう言われて初めて気付いたが、下人は手に老婆から剥ぎとったあの桧皮色の着物をにぎりしめていたのである。下人は迷うことなくその着物を老婆に手渡した。そして、逃げるようその場を立ち去った。

下人の行方は誰も知らない。 (1年男子)

#### 生徒作品②「死んだ女が語る羅生門」

これが運命だったか。女は、もう熱を失って沈黙した体を見下ろしていた。どれほどの苦難をもくぐりぬけて来たはずだが、疫病にはかなわなかったのである。あっけないものだ。女は湿った暗闇の中で小さく嘆いた。

ここは羅生門の楼の上である。むせかえるような腐乱した空気が、辺りに立ち込め渦巻いている。死骸のごみ捨て場——、そこにあるのは絶望に打ちひしがれた冷たさだけであった。

静まり返っていた空気が、不意に揺れた。ある意味で場違いな、まだ終わっていない灯が、もう終わっている樓上の世界を心もとなく照らしたのである。

女の視界の隅に映りこんだのは、まるで猿のような老婆であった。きょろきょろとあたりを見回している。

女は目を細めた。みすぼらしい老婆だ。松の木片の火にはんやりと映し出された老婆の顔は、それこそ人の面影を少しばかり残しているだけだと女は感じた。しかしこの女は気づいていないが、本能的に「生」に執着していたあの日の自分も、たった今蔑んだ老婆と同じであった。女は気づいていない。気づかない。

そうこうしているうちに、老婆が一歩一歩と女の冷たくなった体に這い寄ってきた。女はそれをただなんの感情もなく見下ろす。灯が女の真っ白な肌をぬらすように照らした。

不健康にやせ細った手足が、布切れと化した着物から無造作に放り出されていた。女はそんな自分の姿を見て、かすかに口角を上げる。そんなものだ。人間などどうせ死と共に消えてゆくのだろう、と。

老婆は女の頭を愛おしそうになでた。その口から洩れる吐息は、今にも雨音に打ち消されそうである。老婆は折れそうな首に両手を懸けた。女はそれを見下ろしていた。ただじっと、終わりを待つ。

すでにほこりにうずもれた髪は、するすると抜けおちた。長い長い、美しかった髪は、それはもうあっけなく抜け落ちる。

女はそれを見ている。ほんやりと、冷たく。生きる人間は、そう、愚かだ。かすむ思考の中、女はやっと気づいたのだ。

ただ「死」と背中を合わせたときに、人間に棲まう悪の源が、目に見えて表れる。それだけである。絶対の悪など、女には分かるはずもないが、それでも、人間のこの愛おしくも穢れた闇は、誰しもが秘めているものである。女は気づいた。そうか。自分も同じであった。この醜い老婆と自分は、同じであったのだ。

突然、敗れるように画面が開けた。おとこがずかずかと闇をかき分けて近づいてくる。老婆の干からびた体が打たれたように跳ねた。

女は諦めたように天井を仰いだ。ああ、お前もか。その男の匂いは、自分と同じだ。 (1年女子)

#### ●実施状況、課題・反省点など

この課題は、1年生時における作文としては内容的にも量的にも、決してやさしいものではなかったと思われる。この学年は、2学期後半に『羅生門』を学習したので、提出までの時間的余裕をもたせて、冬休みの宿題とした。

実は同様の課題を、以前にも1年生段階で課したことがあり、興味や意欲を持って取り組む生徒がいるであろうことはあらかじめ予想していたのだが、今回も、上に紹介した2作品をはじめとして、読みごたえのある作品がいくつも出され、課題の実施状況としては概ね満足のできるものであったと思われる。

反省すべき点としては、提出させた作品の評価をどうするかという問題がある。教師が読んで、作文として評価するべきことは言うまでもないが、このような作文課題の場合、それを生徒に返却するだけでよいのか、ということである。前項の短歌・俳句のように、生徒が書いた作品を他の生徒に公開することが出されれば、相互評価ということで、生徒自身得るものがあったに相違ない。実際、以前に実施した学年では、ワープロで文書を作成してデータの形で提出させ、それを集約・編集して冊子の形で配布

したことわざ。多少の手間と時間、そして費用(製本代)をかけても、でき上がった冊子はなかなか立派な出来あがりで、手にした生徒たちも嬉しそうであった。

しかし、ここで報告している学年については、提出原稿は手書き(限定)、冊子の作成もいくつかの理由により見送らざるを得なかった。

その理由の第一は、生徒を取り巻く情報環境の変化にある。この作文課題の要である創作活動は、作文が得手か不得手かによって、意欲にも作品の出来にも差が出るものであり、苦手な生徒にとっては大きな抵抗感を伴うと考えられる。そこで、課題の中に芥川作品の感想文という、取り組みやすいものを入れておいたのだが、「羅生門」と「鼻」を除くとしたのは、インターネット上に引用自由の感想文が存在しているからである。国語教師ならば、多かれ少なかれ悩みの種となっているであろうこの類の引用(筆者自身、全く同じ感想文を複数提出された経験がある)を完全に排除できないとは思いつつ、極力避けるために、教材になっている著名な作品を除外し、かつ手書き原稿限定としたのである。

その結果として、当然のことながらワープロのデータとしての提出とはならず、短歌俳句のように教師がデータ入力することも、生徒一人当たり800字以上という分量では不可能であるため、冊子を作成することができなかつた。もちろん、原稿に加えてデータの提出を求めてよいのだが、冬期休暇中は学校のPCルームが使用できず、3学期に入ってからは、他教科においてもプレゼンを伴う授業が重なって、PCルームが常時満席の状態の中、入力作業を生徒にさせることもかなわなかつたのである。

第2の理由は、生徒用PCの台数不足という学校の施設設備の問題であるが、こうした活動は、そのようなことまでも考慮したうえで、計画する必要があるということであろう。(たとえばこのときも、時期をずらせば可能であったと考えられる。)

### (3) 古文教材を用いた調べ学習とその発表

対象: 3年生 科目: 古典講読(1単位)

<古典B>における言語活動

エ 古典を読んで関心をもった事柄などについて  
課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果を  
発表したり文章にまとめたりすること。

古典の教材の中でも『源氏物語』は、第2・3学年におけるもっとも主要な教材の一つである。したがって授業時数もそれなりにかけられていると思われるが、それでも限られた時数で学習できる分量は、この長編のごく一部に限られていると言わざるを得ない。また、教科書に取り上げられる場面や人物に限っても、場面間のつながりや多数の登場人物の関係について、十分に解説をすることはなかなか難しい。そもそも教科書の教材は、「若紫との出会い」など、定番と言ってよいものが大半であり、多くの名場面や重要なストーリーに言及すらされないことが少なくない。教材『源氏物語』のそのような課題をわずかでも補うことを目的として試みたのが、生徒による調べ学習を、古文の授業の中に導入することであった。すなわち、2年生後半の入門的学习を踏まえ、3年生の1学期の段階で、教科書では取り上げることができない『源氏物語』を、生徒の力でできるだけ読み、さらにその成果を発表することを通して、物語の魅力を生徒間で共有しようとする試みである。ただし、1学期とはいえ大学受験を控えた3年生での活動であるため、古典文学に対する興味・関心が比較的高く、「受験にも役に立つ」という動機づけもしやすい文科系のクラスでのみの活動とした。

また、この取り組みの共通テーマを「『源氏物語』の女君たちを読む」とし、主人公光源氏に関わりを持つ多くの女君を各班で分担して取り上げることによって、自分の班が担当した人物だけでなく他の班の発表を聞くことを通しても、物語の筋や登場人物の役割、主人公との関係など、作品理解に関わる重

要な事柄を理解することを目指した。なお、調べ学習の資料を生徒の手近に置くこととし、私物を含む図書を、選択授業が行われる教室内に設置した。

活動に先立ち、この授業の手順について以下のような説明を行った。

単元：「『源氏物語』の女君たちを読む」

① 文系クラス46名を、男女混合の5～6人ずつの8班に編成し、各班で以下の一～八の女君を担当する。

- 一 藤壺女御
- 二 葵上
- 三 紫上
- 四 明石の君・明石姫君（母と娘）
- 五 夕顔・玉鬘（母と娘）
- 六 空蝉・末摘花（サブ・ヒロイン）
- 七 脣月夜の君・弘徽殿女御（妹と姉）
- 八 六条御息所・秋好中宮（母と娘）

② それぞれの女君について、次の点を調べる。

ア その女君が物語に登場する場面の紹介（原文および現代語訳）

イ その女君の素性（親兄弟関係など）や光源氏との関係を示す系図の作成

ウ その女君と光源氏とが関わる場面の原文紹介  
・現代語訳（必要に応じて解説を付ける）  
・注意すべき語句や文法事項の抜き出しと説明

エ その女君の生涯について概要を紹介

オ その他、紹介すべき重要事項  
(例：時代背景・古文常識など)

③ 発表について

女君一人につき、B4版2枚以内のレポートを作成し、白黒で全員分を印刷、配布。

→ レポートに基づいて班ごとに発表

●実施状況、課題・反省点など

まず、この取り組みの成果と課題について、以下に挙げてみる。

○ 教科書に出てこなかった登場人物について、紹

介程度ではあるが取り扱うことができた。

- もともと作品に興味関心を持っている生徒にとっては、楽しく活動できた。
- 古文でのグループによる調べ学習を新鮮に感じた生徒がいた一方で、あまり積極的に参加しないまま終わってしまった生徒もあった。（グループの人数も多すぎたか）
- インターネットによる調査だけで終わってしまうグループが多く、教室に準備した参考図書が十分に活用されなかつた。
- 紙媒体の資料を効果的に用いて発表する方法については、もっと指導する必要があった。
- 教師によるコメントという形での評価しかしなかつたが、生徒による自己評価や相互評価を取り入れるようにした方がよかったです。

この取り組みについては、古典文学についての調べ学習が筆者にとって初めての試みであったため、以下の①②のような生徒の反応を十分予想できていなかったことが大きな反省点である。生徒にとって内容のある学習にするためには、初めの段階での説明や指導をもっと丁寧に行うことが必要であると思われる。

① 対象生徒について

これは、前述のような目的のもと、3年生の文系生徒1クラス（46名）を対象として行った1学期の実践であった。筆者としては、大学受験を控えたとはいってもまだ1学期であり、全員が履修する科目「古典」とは異なる文系だけの選択科目「古典講読」での取り組みであるので、きっと生徒は興味を持って取り組むだろうと予想していたのだが、期待したほどの意欲は感じられなかった。もちろんなかには熱心に取り組んだ生徒もあったが、多くは、受験に直接結びつかない学習という受け止め方でしかなく、この学習を機会として『源氏物語』の理解を積極的

に深めようという姿勢は、残念ながら見られなかつた。

## ② 調べ学習の方法について

①で見た、生徒の学習に対する意欲の低さは、レポート作成の方法にも表れていた。前述のように、調べ学習の資料を教室に設置し、基本的な書物に触れる経験をさせようとしたが、実際にはほんのわずかしか利用されなかつたのである。

生徒が作成したレポートのほとんどは、インターネットの検索によって引き出された情報の切り貼り(カットアンドペースト)に終始し、その情報の信頼性の確認や、レポートとしての引用の適否、レイアウトの工夫など、発表資料としての体裁を整えることをしていないもの多かつた。近年の生徒は、義務教育の段階からPCを使用した調べ学習に慣れ親しみ、高校に上がってからは、必履修教科情報を学習し、また、各家庭における情報環境も年々向上しているという状況の中に置かれている。IT化が進む現代社会において、それ自体は当然の事であり、日常生活の中で、ちょっとした調べものしたい時には、非常に便利な環境をきわめて短期間で、われわれは手に入れたと言ってよいだろう。もちろん今回の調べ学習についてもインターネット上の情報の利用を禁止したり否定したりしたわけではない。それどころか、源氏物語に関する研究者のサイトを生徒に紹介したりもした。しかし、厳密な検証や信頼性を必要とする事柄について調べたり報告したりする場合、インターネット上の情報をそのまま引用してはならない、ということもまた常識であるはずだ。にもかかわらず、生徒の調べ学習の状況は前述の如くであったし、その不適切さを理解し意識している様子もなかつたのである。おそらく生徒は、これ以前にも他の調べ学習で同じようなレポートを作成してきたのだろう。そして、それを良しとされてきたに違いない。たしかに、修学旅行(本校では現地学習と称する)の事前学習のようなものなら、そこま

での厳密さがなくても許されるかもしれない(ほんとうにそれでよいかどうかは別として)。しかし、『源氏物語』のレポートとしては、せめて見やすい本文紹介の工夫、複数の現代語訳の比較、インターネット上に出てこない注釈の参照、分かりやすい系図の作成、そして生徒自身が理解した物語についてのコメントなどに(これらすべてでなくとも)挑戦し、引用に終始しない自分の言葉で報告してもらいたかったと思う。

## (4) 言語活動を取り込んだ自主教材の展開

平成22年秋、本校において高校教育研究協議会が開催され、筆者は第1学年国語総合(現代文)の公開授業を担当した。協議会のテーマは「新学習指導要領の実施に向けて」。そこで新学習指導要領にある「言語に関する能力の育成を重視し、各教科・科目等において言語活動を充実すること」および「特に、高等学校国語においては、課題探究的な内容を持つ指導事項や言語活動例で、そのことを強く意識することが大切である」ことを踏まえ、以下の言語活動例を適宜取り入れた単元指導計画の展開を、自主教材を用いて試みた。

### ①<国語総合>における「C読むこと」の言語活動

#### 例

イ 情報を読み取り、まとめて発表する言語活動  
文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。

### ②<国語総合>における「B書くこと」の言語活動

#### 例

イ 説明や意見などを書く言語活動

出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書くこと。A 話すこと・聞くこと。

### ③<国語総合>における「B書くこと」の言語活動

#### 例

## ア 詩歌や隨筆などを書く言語活動

情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくったり隨筆などを書いたりすること。

単元の指導計画は以下のとおりであり、前述の言語活動例①は第一次、②は第二次、③は第三次の学習内容に相当する。(公開授業指導案より抜粋)。

### 1 研究テーマ

#### (1) 研究テーマ

「新学習指導要領の実施に向けて」

#### (2) 研究テーマ設定の理由

新学習指導要領では、「言語に関する能力の育成を重視し、各教科・科目等において言語活動を充実することとして」おり、「特に、高等学校国語においては、課題探究的な内容を持つ指導事項や言語活動例で、そのことを強く意識することが大切である」とあることを踏まえ、言語活動を組み込んだ授業の展開を試みる。

### 2 単元（題材）名

「身近な言葉を振り返る

－方言による表現の可能性－」

### 3 単元（題材）の目標

日常生活の中で意識されることが少ない方言を取り上げ、その特徴を理解するとともに、方言による＜言語活動＞をとおして近年変化し減少していると言われる方言の意義について考える。

### 4 指導に当たって

#### (1) 生徒の状況

方言について肯定的にとらえ、残していきたい（いくべき）と考えている生徒が多いが、その一方で、自分の言葉が方言かどうかわからない、自分は方言を使わないと感じている生徒も存在している。課題やグループ活動に対してまじめに取り組む生徒が多い。

#### (2) 指導方針・方法

図表とその解説文、アンケート結果のグラフなどの資料を活用して、身近な言葉である方言を自分の言葉として意識したうえで、それを活用した表現活動に取り組ませ、方言に対する親しみを実感させる。

### (3) 教材選定の理由

①小中学校で実施された「方言と共通語」単元と連続性があるということ

②生徒の身近な題材であるということ

③統計資料的な材料が入手可能であったため、それから情報を読み取り説明する文章を書く活動が可能であったということ

④方言詩という創作的な活動につなぐことができるということ

### 5 単元（題材）の指導計画

第一次 井上史雄著『変わる方言動く標準語』（ちくま新書）により方言に対する意識の変化を知る（3時間）

第二次 方言の長所短所を考え意見文を書く（2時間）

第三次 方言詩を作り、発表する（3時間）

1時 方言詩の作品を読み、自分の作品を作る

2時 グループの発表作品を選び、役割分担・発表準備をする

3時 地元在住詩人の方言詩作品を読んだ後、グループごとに作品を発表する

以下、第一次から順に、本単元の具体的展開について記す。

#### (1) 方言に関するアンケート

はじめに、NHKが1996年に実施したアンケートを踏まえつつ、生徒に対して以下のようなアンケートを実施し、普段あまり意識することなく使っている方言についての自分の感じ方を確認させた。

## 方言についての意識調査

1 あなたは、生粋の石川県人ですか、それとも、県外から転入した人ですか。

- ① 現住所が県外であったことはない
  - ② 少なくとも小学校入学時以降県内に住んでいる
  - ③ 小学校3年生までに県外から転入した
  - ④ 小学校6年生までに県外から転入した
  - ⑤ 中学校3年生までに県外から転入した
  - ⑥ 県外の中学校を卒業し、本校に入学した
- 2 あなたは、この土地（石川県）の言葉が好きですか

①はい ②いいえ

3 あなたは方言をどの程度使いますか

- ① ほとんどいつも使っている（共通語は使わない）
- ② 改まった場所では、方言は使わないようしている（方言と共通語を使い分けている）
- ③ ほとんど方言は使わない、または使わないようしている（主に共通語を使う）

\*それはなぜですか

4 あなたは、高校卒業後、どうしたいと思っていますか

- ① 県内の大学を出て、地元で就職する（ずっと県内希望）
- ② 県外の大学を出て、地元で就職する（Uターン希望）
- ③ 県外の大学を出て、県外で就職する（ずっと県外希望）
- ④ 分からない

5 県外（都会）で暮らす際に、地方訛りができるのは恥ずかしいことだと思いますか

①はい ②いいえ

6 あなたは石川県の方言を残していきたいと思いますか

①はい ②いいえ

\*それはなぜですか

7 ネット掲示板には、方言（たとえば関西弁）が含まれる書き込みがされています。あなたは、そのような書き込みについてどう考えますか。

① 不快だと思う やめてほしい

② べつに不快だと思わない

③ その場の雰囲気による

8 よその土地の人や高齢者が使う方言の意味が分からなくて困ったことがありますか

① ある ② ない

①と答えた人は、具体的に記してください

9 方言が娯楽やバラエティで使われたり、商品（お土産など）に利用されたりしている具体例を挙げてください。

### ●アンケート結果より

「あなたは、この土地（石川県）の言葉が好きですか」という問い合わせに対して7割以上が「はい」と答えている。「県外（都会）で暮らす際に、地方訛りができるのは恥ずかしいことだと思いますか」という問い合わせに対して「思わない」と答えたものも約6割に達している。また、「あなたは石川県の方言を残していくたいと思いますか」についても7割以上が「はい」と答え、その理由として「方言が好きだから」「方言は文化だと思うから」「親しみ、あたたかみを感じるから」などをあげている。その一方には方言に対する否定的な意見や無関心もあるが、総じて方言を肯定的に受け止めている様子がうかがえた。

また記述回答の中には、少数ながら自分の言葉が方言であるという意識を持っていない生徒や、どんな言葉が方言なのか分からぬという声も聞かれた。考えてみれば、方言というものは、方言でない言葉に接した時に自覚されるものであるだろうから、地元育ちの生徒の中には、自分の言葉が方言だしていないものもいるのだろう。そのような場合は、県外に進学や就職をして、はじめて自分の言葉を方言として意識することになるのだと思われる。

## (2) 第一次（グループ活動）

まず、クラスを4～5名からなるグループに分け、井上史雄著『変わる方言動く標準語』（ちくま新書）23頁所収の図1－1「N H K 方言イメージ調査（1996）」（資料②参照）のグラフだけを配布し、そこから読み取れることを話し合わせ、その結果を発表させた。

次に、方言学者である著者の解説を紹介し、そこで述べられている方言観と、自分自身のそれとの違いについて考えさせ、ふだん自分が使っている地元の言葉や方言というものの在り方について考察し、自分なりの意見をまとめさせた。

### ●実施状況、課題・反省点など

生徒に提示した資料が十年以上前のものであったため、資料のもとになったN H Kの調査の原典を確認することができず、数値的には不正確な資料を使わざるを得なかったのが残念であった。しかし生徒は、与えられたグラフから読み取れる限りの情報を協力して読み取り、さらに、他の班の発表によって自分の班の読み方の不足を補ったり、違う見方についての意見を知ることをしたりした。また、身近な言葉を題材としたので、興味を持って取り組むことができていた。

また、グラフから読み取れる石川県の傾向は、「地元の言葉は好きだが、訛りを出すのは恥ずかしい」というところに位置づけられているが、生徒の方言観は必ずしもそうではなく「恥ずかしくない」と感じている生徒が多いことも明らかになった。

## (3) 第二次

第一次のグループ活動によって考察した方言の長所（利点）と短所を各自で整理し、方言の保存についての意見文を書くという言語活動。その際、自分の意見と異なる立場に立って考えてみることの意味を実感させるために、賛成・反対の両方の意見を書くこととした。

## (4) 第三次

方言詩を作り、発表する（3時間）

第1時 方言詩の作品を読み、自分の作品を作る

石川県の方言詩を紹介する。（資料③参照）

各自、方言を用いた詩を創作する。

第2時 グループ内で詩を読みあい、クラスに発表

する作品を選ぶ。その後、発表時の役割分担

など発表の準備をする（2時間）

\*進め方について次のような説明を行った。

### 方言詩を作ろう!!

①グループ編成 1班 7名×6

②グループ内で発表作品を決める

③役割分担を決定する

a. 作品係 作者+朗読者+朗読アドバイザー  
方言の特徴を生かした朗読になるよう、  
協力して演出し練習する。詩の内容によつては、複数で朗読してもよい。

b. リーフレット作成係（2人）

原稿を作成（発表の二日前までに）→  
奥村が印刷 → 発表当日配布  
原稿は白黒でもカラーでも可。手書きでもよい。

詩の内容や雰囲気に合った紙面を工夫する。

c. B G M担当（2人） 選曲（編集）

第3時 地元在住詩人の方言詩作品を読んだ後、グループごとに作品を発表する……（公開授業）

① 金沢在住の詩人徳沢愛子作の方言詩「王様の時」を標準語に直したものを見せて読み、詩の内容やイメージについて読解する。（資料④参照）

② 方言による原詩の朗読を聞く。

金沢出身の国語教員による原詩の朗読を録音しておき、授業の中で生徒に聞かせ、標準語で読んだ時の印象と、方言の朗読を聞いた時の印象との違いを感じ取る。（資料⑤参照）

③ 方言による表現の効果や意義について考える。

- ④ 生徒作品の発表（資料⑥参照）
- ⑤ 最後に、方言の授業全体を振り返って感想・意見を書く。

- 生徒作品「元気なおじいちゃん運転手」の感想
  - ・運転手さんとの思い出が、方言によってより温かく感じられてよかったです。
  - ・その「場」の緊張感がBGMと朗読の両方から伝わっていた。
  - ・BGMなしで自分で読んだのと、BGMありで読んでもらったのでは、全然印象が変わりました。K君の読み方は詩の内容とすごく合っていて、感動しました。
  - ・BGMがよかったです。深い感じがよかったです。
  - ・感動的。読むのもうまいと思った。
  - ・さみしい感じが方言とあっていてすごい分かりやすかった。朗読に感情がこもっていた。
  - ・ちょっとしんみりした感じとK君の読み方が合っていました。
  - ・感情がとてもこもっていた。小学生くらいの子供が話しているような感じがした。
  - ・とても内容が深かったです。切ないBGMとK君の低い声でさらに詩の雰囲気が強調されていた。

#### ●生徒の創作活動について

生徒は、家族や学校生活、季節の風物など、身近なテーマを取り上げて方言を織り込んだ詩を自由に創作した。「詩」の創作を国語の創作課題とすることは、高校ではほとんどないので、はじめは戸惑う生徒も見られたが、他校の高校生や若者の作品を紹介したことでのイメージがつかめ、堅苦しく考えずに詩の創作に取り組めたようである。このような活動をする時の適切な例示の大切さを改めて認識させられた。

#### ●グループ活動について

授業での発表はグループで行った。まず、グループ内で発表作品を選出し、その作者以外のメンバーで、発表作業を分担する。すなわち、まず自分の作

品をグループ内の他者の目によって評価してもらい、よい評価を得た作品をクラス全体に紹介するということである。こうすることで、全員が一度は創作→評価のプロセスを体験することになる。また、グループ内で選出された代表作品の発表に当たっては、作者以外のグループメンバーが、朗読を担当し、発表時に配布するリーフレットの作成・BGMの制作・朗読アドバイザーなどの役割を分担して、発表作業に関わるようにした。その結果、PC操作が得意な生徒はリーフレットの作成に、音楽が好きな生徒はBGMの選曲や編集にそれぞれ力を発揮していました。

#### ●方言の授業を振り返って（感想・意見）

- ・この学習を通して改めて「金沢の方言っていいなー」と思った。他の地域から聞くと、金沢の方言は「キツイ、汚い」と思われるがちだろう。しかし方言で詩を書いてみると、共通途にはない温かさ、親近感を感じ取ることができた。自分が伝えたいことも伝えやすかった。これからも、金沢の方言が受け継がれていてほしいと思う。
- ・この学習を通して方言というものは必要であると感じた。以前は共通語さえあれば方言は必要ないと考えていたけれど、共通語と方言は「言葉」という点で同じであるだけで、その他の面においては全く異なるものだと分かった。だから、これから会話の中に方言の温かさを交え、さらに方言に誇りを持って生活していきたい。
- ・方言は身近な感じがして、親しみを始めたものだと思った。詩も方言を使うことでやわらかい感じになって読みやすく、また共感できたりもすると思う。方言を使って話すと話が弾むので、友達や家族との間で使っていくといいと思う。
- ・今までの方言の学習を通して、方言は共通語よりも温かく、親近感の湧くものであると感じました。自分は上手な方言詩を作ることができなかつたけれど、今日発表された6つの詩はどれも素晴らしい

- く目の前にその光景が浮かぶようでした。
- ・方言の特長や良さなど普段あまり気にしていない事柄をじっくり考えることができたと思う。方言詩などをたくさん読んで、方言の持つ親近感を感じることができたと思う。
  - ・初めは私は方言があまり好きではなかったし自分もそんなに方言を使っていないと思っていたけど、この学習を通して、方言の良さや意外と自分って方言使っているんだなあ…と思った。詩の読み比べで方言と標準語ではどれほど聞いている側の印象が違うのかが分かった。だから、今後はそれを生かして上手に方言と標準語を使い分けたい。
  - ・最初、方言と聞くとなんか避けがちななものであつたけれど、学習してみて自分が使っている言葉が方言だったことや、「王様の時」での共通語と方言との印象の違いを判るととても親近感の湧くもので、嫌悪する漢字は少なくなったし、方言は地方のとても大事な文化だから後世に残していくべきだと思いました。
  - ・方言というのはそんなに堅苦しいものではなくとても身近に感じられるものだと思った。今日の授業を通じて方言の必要性を感じた。
  - ・私は方言をあまり使わないけれど、友達はほとんど金沢の方言を使っているので、改めて方言というものがいい言葉だと思った。はじめは方言は私にとって親しみのない言葉で、なくてもいいと思っていたけれど、積極的に残していくべきなのかな、と思った。
  - ・最初に方言の授業をしたころは、方言と共通語の区切りも曖昧で、自分が方言を使っている意識もあまりなかった。でも、全国の方言への意識を見たり、詩を作ったことで今まで方言だと思ってなかつた言葉が方言だったり、また毎日自分がどれだけ方言を使ってきたかが分かった。
  - ・中学校の時、友人たちと一日中方言を使わないで過ごすという遊びをしていたことがあったが、難

- しくてできなかった。それほど方言というものは私たちの身近にあり体に染みついている者なのだと思った。
- ・方言というのは、こうやって改めて考えると難しいものだと思った。やっぱり日ごろよく使っているからこそ、どういうイメージを持つのか分かりにくいけど、今回共通語と比べたり、詩を作つたりすることで、方言最大の特徴「親近感がわく」というものが、実感できた。方言を残すべきか」というテーマもあったけど、学習してみて積極的に残したいという気持ちが強まった。
  - ・「方言詩」というものは今回初めて見た。方言というのもまた詩の一つの表現技法であり、非常に効果的だということが分かった。そして発表された方言詩はどれも方言の使い方が見事でとても勉強になった。また、今回方言というものに新たな形で触れ、さまざまな面で驚きと発見があった。特に地域ごとに方言のとらえ方が大きく違うというのには驚かされた。
  - ・方言の詩を作るのはとても難しく、また朗読するのにとても緊張しました。うまくできたか自信はないけれど、この学習で方言というのは思ったよりもずっと私たちに身近で深く根付いているものだと分かりました。
  - ・方言詩は普通の詩とイメージが全く違い、おもしろかった。方言には独特のイメージがあり、あたたかく柔らかい感じが表現されていて自分にとって方言が標準語よりもずいぶん聞きやすいものだということに気づいた。方言の学習の序盤で「方言は保存すべきかどうか」という質問に対して、私は「保存する必要はない」と考えていたが、いろいろな方言詩を聞き、方言というものを「保存すべき」という考えは大切だと思った。
  - ・普段使っている方言をいざ意識して使おうと思うと意外と難しかった。しかし方言の詩と共通語の詩を比べると、方言詩の親しみやすさがとても感

じられ、そのような手法が有効だと学ぶことができた。また、自ら死を作るのはなかなか進まず、普段詩を作っている人はすごいと思った。

- ・今回、この方言詩と方言の発表を聞いて、方言は人々との触れ合いや温かみを表現できるものだと感じた。方言詩の発表では多くの班が「友達」や「家族」などの人との触れ合いを題材としていたことは、方言こそが表現できる親近感を最大に応用していたことだと思う。
- ・話し言葉である方言を見時にして使っていくと変な感じがした。方言を使った表現はある程度は身近に感じられるものであったが、他の地域の人には通じないことを考えると、残念なところがあった。また、すべてを方言で書いた詩などの、方言が多すぎる表現は、逆に遠い感じがした。
- ・大阪の強烈な方言と、東京の山の手言葉が飛び交う環境で過ごしてきたからなのか、金沢の方言は、読みにくかったり全く意味が分からなかったりすることがあるくせに、正直面白みがないと思う。でも、自分の地元の言葉、家で使っている言葉について考えるいい機会になったと感じる。
- ・方言は普段何気なく使っているけれど、いざ氏にしようと思うとなかなか難しかった。こんな方言もあったなあと改めて考えさせられることもあった。やっぱり方言で作った詩は、身近で親近感がわいた。自分はこの土地の人間なんだなと思った。
- ・今まで方言は好きでも嫌いでもなかったけど、少し好きになったし、積極的に残していくたいと思えるようになりました。
- ・方言を使うか共通語を使うかによって詩の雰囲気がこれほどまでに変わるとは思わなかったし、新しい発見だった。方言の暖かさや身近な親近感のわきやすさも感じることができた。
- ・方言というものの大きさがよく分かった。とくに方言詩だと、その方言でしか伝えられない思い、というものがたくさんあり、詩の幅が広がったと

思う。日常でも、方言を使っていって、将来下の世代に残していくたいと感じた。方言はなくしてはならない、そう思える授業だった。

- ・自分は今まで方言を使っている自覚はなかったし、何が方言かもわかつていなかった。それでも意外と身近な言葉が方言だったなどと気付かないところで使っていることが分かった。しかし、聞いたことのない、意味の分らない方言も多くあった。
- ・私の知らない方言がたくさんあってビックリした。また、共通語と方言では印象がこんなに違うことに驚き、方言の深さを改めて感じた。普段何気なく使っている方言も言い方を変えれば、こんなに相手の受け取り方が違うんだとさまざまな発見ばかりだった。とても方言に興味がわく授業で、これからも方言を後世に残していくことが大切だと思った。
- ・方言には方言の良さがあるということが学習を通して本当に分かった。自分でも気づかなかった方言がたくさんあってビックリした。方言はなくなりつつあるが、これからも続いていってほしいと思う。
- ・現在ではあまり使われなくなっている方言の良い側面をたくさん知れたと思います。しかし、やはり方言は公式の場では、あまり使うべきでないということも再認識することができました。方言はやわらかさのみを出すわけではなく、臨場感のようなものが出せるともわかりました。
- ・方言には独特な温かさがあり、意識して聞いていると何気なく使っていた言葉が方言だったりしてより方言を感じられた。
- ・方言の詩には、共通語の詩では表すことのできない地元のあたたかさや優しさが溢れていた。それは、読む私たちが金沢人であり、方言が深く根付いているからこそ、感じられたことだと思う。みんなのいろいろな詩が読めてとても楽しかった。

#### 4. おわりに

新学習指導要領で充実が求められている言語活動にあたると思われるものを、過去の実践事例の中からいくつか取り上げて示した。言語活動の充実については、石川県教育委員会主催の平成22年度石川県教育課程研究集会（高等学校国語）においても、研究課題として取り上げられており、新学習指導要領の実施に向け、現場での研究や実践が進められている。

平成20年1月に中央教育審議会の答申が公表されました。そこでは、変化の激しい社会に生きる上で重要な力である思考力・判断力・表現力等に課題があるとの認識が示され、それらの基盤となる言語に関する力を育む必要があることが述べられています。これを受け、新高等学校学習指導要領においても、国語科のみならず各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動（言語活動）を充実させることが求められました。そこで、本県国語科としても、言語能力の育成に向けて生徒が主体的に学習活動を行うための実践や研究協議を行うことで、言語活動の充実を目指したいと考えています。

具体的には、下記の研究課題について指導事例を作成して下さい。また、作成にあたっては、生徒の主体的な学習に資する言語活動を取り入れて下さい。当日は各事例をもとにして、研究協議を行う予定です。（「平成22年度教育課程研究集会における研究課題の提出について」より）

課題として浮上してくることであろう。ここに挙げたいいくつかの実践例に見るとおり、言語活動は生徒の主体的な取り組みであるだけに、事前事後の指導が重要となる。事前指導としては、活動に入るにあたって動機づけのための趣旨説明・方法的指導が、活動に入った生徒に対しては、活動方法や活動状況、意欲的に取り組もうとしない生徒がいた場合の個別指導などが、そして事後においては、評価と活動成果の取り扱いが、それぞれ大きな問題となる。とくに事後の評価と活動成果の取り扱いについては、発表会・生徒作品のプリント化・点数化などが考えられるが、いずれの方法を取るにせよ時間的余裕を必要とする場合が多い。いわゆるテストで測りにくいうした生徒の学習活動を、どう評価していくかについては、今後十分に研究、検討していく必要があると思われる。

言語活動そのものは、国語科の指導の中で従来からさまざまな形で行われてきたものである。しかし、今後は他教科でも積極的に導入されてくるなかで、国語科としてどのようにこの活動に取り組み、他教科とのバランスを考慮しながら、学習指導要領の掲げる目標を達成していくのかという点が、おそらく

### 十月のつきなみ

秋雨ののちの虹から感じる静けさ

帰り道風にふかれて空見れば真つ赤に染まる秋の夕焼け

鮭の骨ほおばるときだけ入つて

蓑虫をあざけり笑つた明くる朝毛布を蓑とすわれ此にあり

八つ頭勝手に食べたの奴かしら

果でもなく地に降り注ぐ秋時雨

霧の中白露光る月草よ思い焦がれて届くことなし

この秋は松茸よりも暖がほし

夜の中草から聞こえる秋の声

虫の声瞳を澄ませば暗闇に

秋の蚊帳過ぎし夏の日愛ふかな

日陰ある右側の道自転車で選んでこいでいたのも昔

寂しさと期待を運ぶ秋の風

秋の空秋の夕暮そめてゆく

帰り道耳をすませば秋の声

帰り道ふと見上げれば流れ星

ほつかほか石焼き美味し薩摩芋

秋の空見上げてみれば天の川

枯葉落ち日々変わりゆく木々たちと同じく変わる自分の心

あの残暑時が経るのち消え去つた冷風襲う家が恋しく

夕暮れ時西の彼方を見上げれば黄金に輝くいわし雲かな

見上げれば中秋の名月部活後に

流れ星今日こそ願い叶うかな

帰り道いつもの景色で月見かな

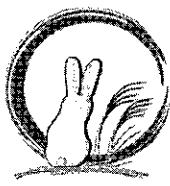
暗さゆえ刻を疑う夜長かな

窓からはひと足早いあきざくら

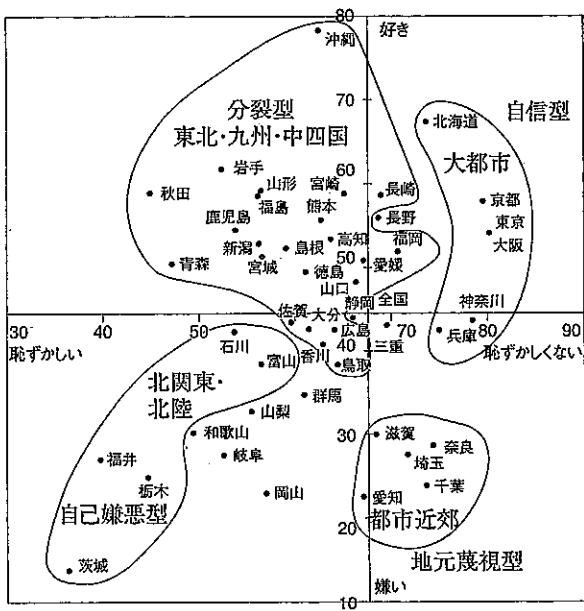
秋晴れと感謝の言葉身にみた

豊作で三回食べた松茸飯

静かな夜虫の声だけ聞こえてる



雄樹	里香	彩	優貴	和史	次郎	早織	健太	智弘	美月	瑛子	朱里	裕久	拓人	尚希	恭子	峻史	公祐	花実	勇吾	暁洋
----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----



井上史雄著『変わら方言動く標準語』(2007年刊 ちくま新書) より

「第1章 図1-1 NHK方言イメージ調査 (1996)」



## 王様の時（共通語）

徳沢愛子

夕日に向かつて  
背なかを見せて 老人が立つて  
杖をついて  
孤独だ  
夕陽が輝やいでいる  
老人は 夕陽を驚撃みにしている  
ひとしきり 耳のあたりで  
白髪が 風に揺れる  
白髪は 赤く染まつて  
まるで 燃え上がる王冠だ  
王様になつた老人は  
財産も 夕食も  
肩書も 名声も  
親戚も 切り落として  
つまらぬことは  
なにも考えずに  
老人だけになつて 立つて  
夕陽に溶け出した命だけになつて立つて  
時を縮めて 夕陽だけをみつめている  
夕陽はただあかあかと輝いている  
老人は 烈しく静まつて  
どうしてもこうしても 動かないと  
いつとき限りの この永遠  
みんな 跪く  
みんな 仰向く  
ああ 王様の時だ  
荒漠とした 夕暮れ時だ

## 王様の時（金沢弁）

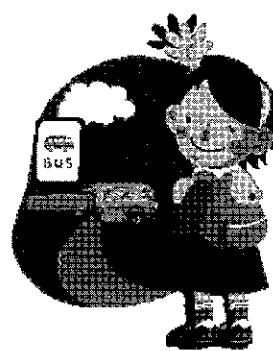
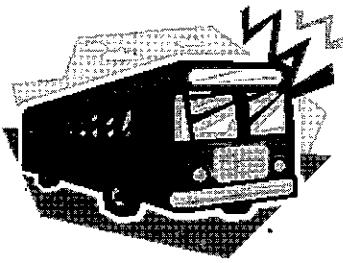
徳沢愛子

夕日に向こて  
背<sup>せ</sup>見せて じいちゃんが立てつとる  
杖ついて  
ひとりぼっちや  
夕陽が輝やいとる  
じいちゃんは 夕陽を驚撃みにしとる  
ひとしきり 耳のへんで  
白髪が 風に揺れる  
白髪は 赤うらと染まつて  
まるで 燃え上がる王冠や  
王様になつたじいちゃんは  
錢こも よながも  
肩書も 名声も  
いつけも 切り落といて  
ととのわんこたあ  
なも考えんと  
じいちゃんだけんなつて 立てつとる  
夕陽に溶け出した命だけんなつて立てつとる  
時をちぢくつて 夕陽だけをみつめとる  
夕陽はたつだあかあかと輝いとる  
じいちゃんは 烈しいらと静まつとる  
いつすり むつすり 動かんと  
いつさんばらりの この永遠  
んながら 跪く  
んながら 仰向く  
ああ 王様の時や  
ぼうぼうの いちくれ時や

まつで…まるで よなが…夕食  
いつけ…親戚 ととのわん…つまらぬこと  
いつすり むつすり…どうしてもこうしても  
いつさんばらり…いつとき限り  
んながら…みんな いちくれ…夕暮れ

## 元気なおじいちゃん運転手

昨日もこそこがす  
今日もこそこがす  
明日もこそこがす  
バスの運転手さんは  
ぼくに会うといつともこそこがす  
毎日こそがす  
そやさかいぼく  
こしょこしょ強くなつてんよ



## つながり

祖父母の家には  
いろんな人が集まるげん

おじちゃんもおばちゃんもみんな  
氣づけばここに集まつとる

だからここは  
いつもにぎやかねん

ぼくもう卒園したんだ  
運転手さんは会うといつとも  
ブッブーって鳴らしてくれとつたね  
お返しにぼく手大きく振るげんね  
ぼく嬉しかつてんよ

でもいつの間にか  
運転手さんの顔忘れてもうた

あれから何年たつたんけ?  
運転手さん今どうしとらん?  
ぼくは元気にしとるよ  
顔は忘れてしもうたけど  
思い出全然忘れとらんよ

運転手さんはぼくのこと  
覚えとつかな  
ぼく寂しいげんよ

こんな祖父母の家が  
大好きねん



# かみの冬

かみの冬  
雪もよう

氣いつ  
ほってか

朝日え覚め  
ベッドから出る

学校へ行く  
今日

ほや「となんないこと  
ねーわけじゃないそいや

雪遊び  
寒いがやって慣れればじやまないげん

みんなで近くによりそって  
あっただかもんでも飲むまつし

みんなで雪かき行っちゃう

# ネクストイヤー

外には雪が降つとい

年をまたいだ  
新年を迎えた

初詣に行かんけ  
俺は言った

はよ着替えまっしゃ  
と母の声

はよ行かんけ  
と父の声

その声にせかされ  
家を出る

外には雪が降つとい  
おまじりしんご

と父の声

その声のいわれるがまま行動する

吉たつた

吉やすから今年こじりとあらべとひがい  
と母の声

調子にいたのこかんく  
と父の声

その声に心がゆみんだりしまつた

あんなことな

今年も  
いつもどかわりある日々が

始まるのである

